

風 土 論 考

— 経営学的究明 —

裴 富 吉

(1982. 1. 12 受理)

も く じ

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------|
| I はじめに
—いま、なぜ風土論が問題なのか— | (i) 風土をどう考えるか |
| II 要約 [その1]
—『経営学の基礎研究』— | (ii) 和辻『風土』の評価
=以上、本号= |
| III 要約 [その2]
—『現代経営学の基本問題』— | (iii) 風土類型について |
| IV 和辻『風土』の評価
—和辻「風土論」からなにを学ぶか— | V 風土の社会科学的意味 |
| | VI 風土問題と企業経営 |
| | VII むすび |

I はじめに

—いま、なぜ風土論が問題なのか—

筆者はかねてから経営学という学問が風土問題・風土論に対面すべきであるとの持論をもっていた。この発想は《風土論的経営学》と称されるものであり、「生態経営学」となって具体化される方向性があることを、すでに示唆してみた¹⁾。

最近、社会科学の分野においては、“地域主義” Regionalism なる提唱が<広義の経済学>という展望をたずさえながら展開されている。そこで筆者は、自身の経営学構想である《風土論的経営学》の具体的な理論展開のために、『地域主義の経営学』という標題を打ちたて、ひとまずこの方途にそって考察をおこなうことにした。このことは筆者の研究志向から必然的に導きだされたひとつのむすびつきなのである。

いま、日本の経営学は自国の経営問題に対処する学問としてみると、その現実的分析力・政策（論）提言力という理論的局面において大変な難関に遭遇している。この国の経営学は学問として本物ではなかった。それは、自分の地にある現実問題を正面より十分に分析できない理論しかもちあわせていない。いまさらのように、学問的に問題だらけの「日本的経営論」が横行する事態をみせつけられて、筆者はその感をいっそう強くするのである。

日本経営学会は1925年〔大正15年〕に創立された。以降、斯学会の歩みのなかで、決定版ともいってよい<経営学原理>書が、いまだなお与えられていない実情にある。本当の経営学元年は今年〔1981年〕あたりに求めたほうがよいのではないかと思われるくらいに、この学会は

その低迷ぶりを呈している。

本稿は、日本の現状に、より適合した経営学理論の構築をめざす筆者のささやかな試論にすぎない。そのさい筆者が大きな関心をいただく問題対象が風土問題であり風土論なのである。ここに自分の原理論樹立のための手がかりをさがしてみようと考えている。

注

1) 拙稿「風土論覚書—三澤勝衛『風土論』の今日的意義—」, 札幌商科大学『論集』第28号<人文編> 昭和56年1月。

II 要 約 [その1]

——『経営学の基礎研究』——

筆者の『経営学の基礎研究』(白桃書房, 昭和53年) 第1編「経営と風土の接点」における論旨はなんであったか、これを説明しよう。

筆者は、経営および経営学上の諸問題を検討するための、方法論的基礎の形成をめざしている。それは風土〔論・問題〕の視座から経営問題を考察する方向をとる。この試みはきわめて原初的、予備的な考察の段階にある。とりあえずは和辻「風土論」に徹底的な吟味をくわえ、風土概念の動態化を主張してみた。

当面は、こういう三要因の連関性をもって「経営と風土の接点」の問題は把握されればよいだろう。

〈自然的風土 ↔ 社会的風土 ↔ 経営(学)上の諸問題〉

和辻の風土論は「それ自体」性^{アン・ジツレ}という性格において静態論〔決定論〕の弊害を包する。だが彼にはすてがたい着想もある。たとえば日本人の国民性に関する解説——「しめやかな激情、戦闘的な恬淡」「人と人との間柄」など——は、日本〔人・文化〕論として出色の概念説明になっている。しかし、彼の風土論は<直観>に強く依存する発想から出発しているために、重大な問題性もかかえこんでいる。それは「随所にイデエを見る眼」(谷川徹三)であった。

和辻風土論の問題性、つまりそれが克服すべき課題は、つぎのように表わされる。ひとつは、人類は→生物的存在=自然的、社会的・歴史的存在であり、技術的な特定の生活様式にあって自然に相対している、ということ。ふたつは、風土概念の動態〔理論〕化をはかる、ということ。この二題をどう解決していくかは、その風土論を再生し活性化するうえで不可避の課題となる。

筆者の立場は経済科学としての経営学であるかぎり、経営問題を主軸に究明をすすめるというところにある。同時に質的には同等の位置づけをしながら風土問題を取りあつかっていく。風土問題のとりあつかいは、この国の経営学にとって一種のカンフル剂的役割を期待しうる。風土問題は、体制・階級・民族・国家などの用語とならんで、社会科学的に不可欠の論点が存

在することを意味する。

図式的になるが、「経営と風土の接点」という問題構成を説明しておこう。

《風土〔自然的風土 ↔ 社会的風土〕 ↔ 経営問題（管理・組織・生産・技術など）》

——とりあえず、日本の現実問題として考える——

Ⅲ 要 約〔その2〕

——『現代経営学の基本問題』——

本書『現代経営学の基本問題』（白桃書房、昭和55年）では、第4章「風土論と経営学」に、「経営と風土の接点」の地理学的考察、という副題をつけて検討をすすめてみた。

経営と風土の接点そのものは、その理論的機構としていかなる《媒介の論理》を内在させているのか。「日本経営」における〈経営の論理〉（一般性）は、どのように〈風土性〉（特殊性）を体现しているのでしょうか。日本の経営学が、この論点、つまりこの国の経営における一般性と特殊性の相関を、いかに分析しているのかというならば、いまだこの作業は不十分な状態にあるといわねばならない。

筆者の意図は「経営の論理」が《媒介の論理》を借りて風土問題を取りこむこと、さらにはここで唯物史観と唯心史観を高次の総合的視座において統一することにある。「経営の論理」は客観的因果関係（存在の世界の連関）を、また「風土問題・論」は目的論的連関（意味の世界の連関）を分明にするときに役に立つ。もちろんこの論法は極端な二元的思考を提示している。

「経営と風土の接点」→《媒介の論理》は、どのように表現されるのであろうか。まず簡約なモデルはこうなる。

《自然（風土）－生産過程－人間集団》

この問題は実に複雑である。つぎにこういうモデルがある。

《風土 ↔ 経営〔生産活動〕 ↔ 人間・社会》

和辻の風土論を社会科学的立場より本気に論議している論者が二人いる。高島善哉と飯塚浩二である。

高島のいう、風土論としての「生産力の論理」は、こう図式化できる。

《風土〔自然的風土・歴史的社会的風土〕（→この複雑な形態）↔ 労働過程》

ある産業学者は自分の研究対象は、生産力と生産関係という枠組をこえた人間－自然にあり、この学のトータルな対象の構造は唯物史観よりもはるかに複雑化した重畳性をもつという。

《風土 ↔ 生産 ↔ 経営主体》

という関連は、そのような研究対象の全体性のなかで考えられるべきものなのである。人間－自然系（主体－客体－主体）と人間－人間系（主体－主体）という二つの糸を媒介するもっとも基

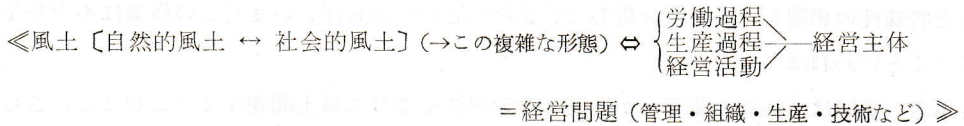
礎的な構造=過程が、経営学では生産活動とこれを指揮する経営の主体的行動になる。ここに介在する《媒介の論理》はなんであるのか究明の余地が出てくる。またここには「比較経営学」の見地が「比較の経営学」あるいは「比較経営の学」として要請されている。〈生産 ↔ 経営主体〉の比較研究は、〈風土〉問題の解明にまでさかのぼる必要を生ぜしめる。この比較研究はさまざまな《媒介の論理》に関する研究になるものでもある。「マルクスとヴェーバー」的課題が提起されている。

IV 和辻『風土』の評価

——和辻「風土論」からなにを学ぶか——

(i) 風土をどう考えるか

前節までに出ていた「経営と風土の接点」の構成方法(図式)を総まとめ的に表現してみたい。



こうした関係をさらに統合的な図解にして表わせば、図1(次頁)のようになる。

情報科学の入門案内を説くある論者は、自然と人間の関係についてこう述べていた¹⁾。

人間は自然を支配し、変化させるなかで自分自身を変化させ、自分の人間としてのもろもろの特性を発展させもする。人間は自然を利用する生産過程のなかで、つづけざまに自然を破壊してきた。破壊された自然はもはや再び人間にめぐみを与えることはしない。人間は自然を支配しようと試みた結果、「自然からもまた疎外」されてしまった。なぜこんな結末をむかえねばならないのだろうか。それは一言でいって、歴史的意識に立脚した正しい行動をとらえなかったからである。道具をつくり、これを利用し、自然の諸対象、および諸力を人間の目的に奉仕させるにあたって、人間は正しい目的をもち、真に創造的な見地に立って判断し、企画しなかったためである。賢ぶっていた人間の愚かさ、浅はかさが、ここにおよんで表面化してきたように思われる。

いうところの「人間の目的」とは、今日、われわれの資本主義経済社会体制にあっては、その中核的代表的な制度機関たる企業経営の目的、いかえれば営利主義=利潤追求において端的かつ集約的に現われている。

いずれにせよ日本の社会は、文明とは土壤の生産力の結果であることを忘れるにいたった²⁾。資本主義発生以前の破壊が、日本では自然と対応する文化の発展過程でおこなわれたゆきすぎ

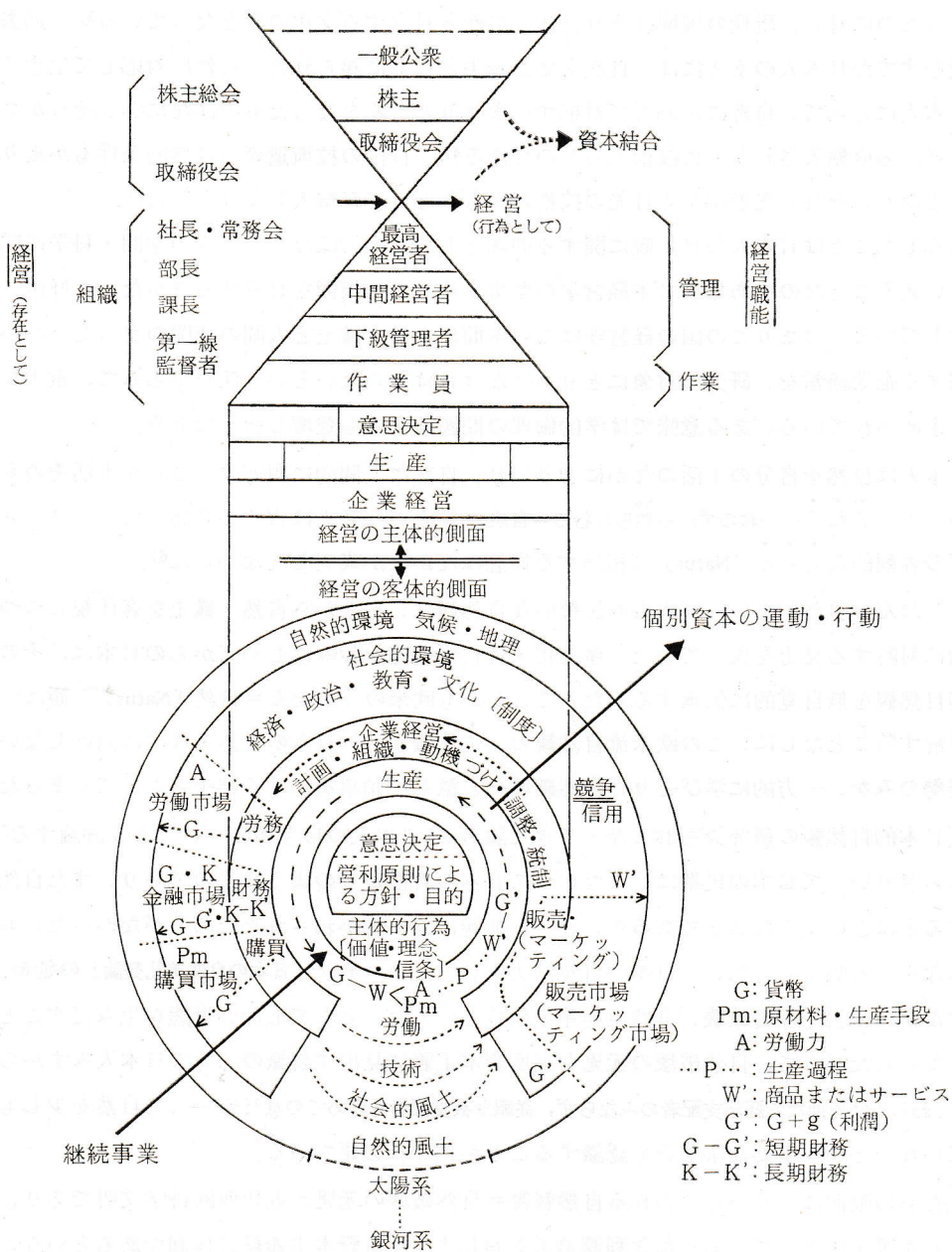


図1. 企業経営の構造と過程—風土との関連でみた—

※本図は、山本安次郎『増補経営学要論』196頁、第6図と、同『経営学の基礎理論』179頁、第3図、180頁、第4図を参考にして、筆者が加筆作成したものである。とくに、下半分の部分は筆者の創意によるところが多い。

1978. 2. 22 作成
1981. 8. 14 修正

であったのに対し、現代の破壊はそれ自体が自然と対立する文化の礎となっている³⁾。過去の伝統をすてた日本人のまえには、自然もまた過去とともに葬られた。自然に対応して生きてきた日本人にとって、自然にかわって対応すべきよりどころとなったものはなにか。それがヨーロッパから直輸入された近代技術だったのである⁴⁾。自国の技術遺産も自然的条件もかえりみることなく、それら先進国から目先の技術だけでもぎとって直輸入しようとした⁵⁾。

こうしたことは日本人の自然観に関する問題としてだけではなく、日本の学問・科学に関してもいえることなのである。日本経営学の歴史もそうした指弾を甘受するほかない〈好例〉を提供している。つまりこの国の経営学はこの学問が自然・風土と人間の連関のまっただに存在する企業経営を、研究の対象にとりあげなければならないという任務からみて、重大な反省を求められている。ある意味では学的倫理の問題性すらも登壇しそうである。

日本人は自然を自分の生活のなかにとりいれ、自然に人間的に順応することが生活そのものであった。じねん——おのずから然らしむる=自然——という考えは古くからあっても、ヨーロッパ流の客観的なしぜん (Natur) に相当する概念はなかなか成立しえなかった⁶⁾。

「じねん=自然」という日本人の伝統的な自然観は、もとから自然・風土を客体視しつつ意識的に対峙する見方を欠いていた。産業化・近代化の途を歩みはじめてからの日本は、その伝統的自然観を無自覚的に伝承するかたちで、しかも欧米の「しぜん=自然 (Natur)」観は正當に理解することなしに、この欧米流自然観の、主体側の——日本の自然・風土に適應しない対応姿勢のみを、一方的に学びとり、自然破壊へと激しく拍車をかける結果となってしまった。

〈日本の自然観の研究〉をおこなってきた論者は、日本人の自然観についてこう評論する⁷⁾。

はっきりいって日本の民衆はいまだかつて日本の自然がどのようなものであり、また自然を愛するとはどのようなことであるか、という命題に立ちむかわされたためしかなかった。おまけになんども唱えられた、「日本の自然は美しい」という教え〔日本の自然美礼賛論〕の延命が、かずかずの公害や環境破壊、自然生態系の圧殺といった、とんでもない事態を生み出すことになった。したがって、自然破壊の元兇を高度資本主義に見出す認識の一方で日本人みずからが——くわしくは兇悪なる経済支配者のみならず、従順な被支配者も含めての意だが——、自然を少しも愛していないという重要な事実をも認識することが、今日必要である。

私たちの眼前にくりひろげられる自然軽視=自然破壊の元兇が近代西欧科学文明であり、またこれを手玉にとって、あくなき利潤追求をおしすすめる資本主義経済体制であるということは、いまでは誰の眼にも明らかとなっている。しかも当の元兇である大資本の指導者のほうで日本人はもっと自然をだいにしなければならぬ、自然とともに生きてきた日本人の伝統的心性をとりもどさねばならぬ、現代の日本人はものの価値よりもこころの価値を重んじなければならぬ、などと平然といいはなっている事実もある。事態はひどくこんがらかっている。

こうした発言は、これをする論者が特別に反体制的思想やイデオロギーの持ち主でないこと

はともかくとして、まことに至当な見解であるとうけとるほかない。

今日まで、日本の経営学は自身の立場において自然や風土の問題に、本気で立ちむかって考えてみたことがあるだろうか。この学問が日本の自然・風土の現状に対して負うべき学的責任は大きい。この学問が企業経営を研究の相手にするものであるならば、いわずもがなのことがらであろう。日本の学問がいままで自然・風土問題を理論上の契機としてとりこむ努力を欠いていたことの意味はこのうえなく大きい。

筆者が「経営と風土の接点」というふうに経営学の視座を提唱し、もの（「物理的なもの」「存在」）とところ（「価値的なもの」「意味」）の両点を包括的に統合化する立場をえたいと強調したのは、前段で言及したようなこの学問の状態をなんとか打開しなければならないと思うからであった。経営と風土は結合されて究明すべき問題なのである。

風土に立ちむかう主体はあくまで人間にある。新たな社会的変化のなかでは自然への対応の方法もおのずから変化せざるをえず、そこに新たな人間と風土との対応が当然めばえ、発展してくるはずである⁸⁾。そのためには「悟性主義」よばわりされながらも、いっさいを無媒介的に「無限抱擁」しがちな日本の精神風土を、あえて対象化する批評の視座に自己をずえる必要がある⁹⁾。日本（人）にあっては、人間における自然が外的自然と明確に区別されずに癒着し、また人間と人間との共同（連帯性）も自然的なものを基礎としていた。人間共同態が自然的なものを基礎とするかぎり、全体が個に優越し、「閉じた社会」の性格をもつようになることはさげえない。この風土自身が人間の歴史的・社会的活動の基礎であると同時に結果であることがはっきり認識されなければならない¹⁰⁾。

具体的にはこういうことになる。日本の天皇制の中核は“民族エゴイズム”である。それゆえこの「天皇神学」こそが国民国家の日本的イデオロギーとしてその団結を強固ならしめるとともに、また日本民族以外を排除する植民地侵略と戦争の精神的支えとして、日本資本主義と深くむすびついてもいた。そしてこのような「天皇神学」の根底にあったものが、日本民族特有の清浄思想であり、それが高温多湿の日本の風土と深くむすびついていたことは疑いえない¹¹⁾。

経営学にとっても日本人の自然観と民族性は重要な論点である。日本の企業経営に関してもいわれる「経営家族主義」的管理体制——企業一家意識、終身雇用、年功賃金、企業別組合という諸特性——が、この国の自然・風土を痛めつけ、破壊するのに、どのくらい力を貸していたかを考えてみればよい。日本の企業経営それ自体がひとつの典型的な「閉じた社会」である。そうした経営風土は日本の経営史のなかにおいてどのように醸成されてきたのか。もう一度「経営と風土の接点」を表わす図式を思いおこしてほしい。本節冒頭のそれを簡略化してしめそう。

《風土〔自然的風土 ↔ 社会的風土〕 ↔ 経営主体 = 経営問題》

「人間は地域的な存在だ」。とくに人間のこころの働きには普遍的な性格とともに、彼らが生れそだってきた地域独自の性格がある。それは人間が自己をとりまく地域にいかに対応しつつ生きてきたか、そこに独自の生活様式や思惟形態を發展させてきたかの歴史ともなり、ひろくその民族のエートス、あるいはそれを基盤とする文化の形成ともなってきた。まことに人間のこころの軌跡は一定の地域を無視しては十分に理解しえない。こころの内容が地域や民族によっていちじるしく異なるからである¹²⁾。

経営学は、こころの問題の発生源、すなわち風土性の問題を、的確にとらえうる視座が必要である。日本の経営学は自国の風土特性から自由でない。この学問の精神的風土は日本的な風土の一般的特質と同質である。日本の経営学は自分の学問的体質を客体視できていない。この国の経営学に与えられている課題をしらない。そういう学問的風土のなかにあるのが日本の経営学なのである。日本の経営学が自国の経営問題に対して、まったくといていいほどに政策提言力をもたないという事実はけっして奇異なことではなく、当然の事実であるにすぎない。

日本の経営学は理論として二重のくびきをあてられている。まずその理論が欧米流の思考そのものであることから生ずる現実遊離性。つぎにそうした理論を日本の経営現実に実際に適用していないこと。こういってしまうと、日本の経営学理論はまるで落第であるというほかなくなる。しかし今日において斯学界の理論活動は活発でもある。だがそれも絵空事、画餅のような活動としてであるが……。筆者はこうした発言が極論になりかねないことをしりつつも、なおそういっておきたい。

なかんずく、地域とは単なる風土的なものだけではなく、そこに住む民族、そこで展開された歴史すべての要素がからみあって、他と異なる独自の^{パーソナリティ}性格をつくりあげている空間をさす¹³⁾。したがって静態的な見方になることをおそれずにいえば、「伝統」とよぶべき、時代とともにかわらない、時代をこえた基本的な形態といったものは、究極的に数千年間かわらない風土の影響によるものといえよう。このことは、その影響をもっとも直接的にうけている農業においてもっとも明瞭に見出すことができる¹⁴⁾。

このような風土観は、自然破壊、風土景観の激変を体験している今日の現実のなかにおいてこそ、あえてとりだして傾聴すべき見解であろう。今般叫ばれている「地域主義」は、〈伝統〉を〈風土〉を大切に、生かすという意図のもとに主張されている。これに対しては、伝統墨守的である風土観になってしまうという点において、故意にその意図をうけとめる余地が生じてこよう。

というのは、自然が厳然として過去を引きついで息づき、人間もまたその自然のなかでくらししている以上、過去に属するものすべてを切りすててしまうことほど、無謀で非現実的・非科学的な話もないからである¹⁵⁾。日本の産業化・近代化は人間や技術を自然・風土から引きはな

すことばかりに力をそそいできた。風土、すなわち気候的条件や地理的条件などの自然環境の差が、人間の行動様式に大きな影響を与えるのは当然のことである。ただし、自然環境と人間の行動様式という異なる次元に属することがらを、そのあいだをつなげる媒介項を無視してただちに相関させて結論をみちびくことは、はなはだ危険である¹⁶⁾。

だから「経営と風土の接点」という筆者の問題構成でいいかえるならば、人間の行動様式とは経営の行動様式、媒介項とは接点→《媒介の論理》をさしている。経営学にとって風土なるものはいったいなにを意味し、またそれは理論上の契機としてどのようにくみいれられればよいのか、きわめて重要な課題である。

ある識者は、風土をこう定義する。風土というものは風景ではない。もちろん、風景を含むことを否定はしない。風土は、無形なものと同有形なものがある。無形とは、その土地、その昔からの住人、環境等から醸成された気風というもの、国民性を局地的に解釈したものとしてもよい。有形としたばあいは、その土地の人の感情を本位として考えた土地、気候の総合である¹⁷⁾。この定義は風土を無形なもの＝社会的風土（精神的・文化的風土）と同有形なもの＝自然的風土に分別して考えている。

またほかの識者はこう定義する。風土とは人類社会の環境としての自然界それ自身と、その自然界の生みだしている事象の人文化されているもの同が、複合してわれわれの周囲に実在している総量をいう。自然的風土は気候、土地（表面・土壌・流水・鉱物資源）、海洋と海岸、植物である。人文的風土は人口の密度と移動、住家の間取と構造、生産物、交通である。それをいかにいいあらわすのが、もっとも総合的であり、実証的であるかについては、「地域的実在」(areal reality)ということばを用いればよいだろう。このことばは、われわれを圍繞している自然的風土と人文的風土との有機的関係を具体的に表わしたものである。だから一言でいって、風土とはわれわれの環境としての自然的ならびに文化的現象が複合している〈地域的実在〉である¹⁸⁾。

筆者の観察でいうならば、問題を企業経営の側にひきつけて考える必要がある。企業経営が風土に与える影響のあり方が、今日大問題なのであり、「地域主義」というような提唱もそうした関連性のなかで、〈地域的実在〉の尊重をいかに達成するかを当面の課題にしている。

問題の根源はどこにあるのか。資本主義体制の本性は、これを中核において構成する制度機関である企業経営が、風土に——なかでも自然的風土のうえに自己の個別的生産力の場を形成している事実を忘失し、風土を——なかでも社会的風土→経営(的)風土の側から接する自然・風土をわがものにしえたつもりで、実はこの自然・風土を軽んじ凌辱した始末に十分気づいていないところに、はっきり現出している。公害・環境問題の最大の関与者が誰であるのかはいうまでもないところである。

本来、資本主義的企業経営は自己の目的追求に利しない要因は度外視 - 外部費用化するし、反対にそれに利する要因は徹底的に活用しようとする。この性向は自然・風土そのものを保守し尊重しようとする立場とは、ひとまず無縁である。企業経営は自然・風土に直接対峙しながらそうあるほかない実在でしかない。

今日の、資本主義体制やこれを構成する最有力成員である企業経営が忘れていたことは、人間の生活が自然的風土に順応しつつ自然物を利用してその生活を営み、かくしてながい年処を経て人文的風土を産みだしていることである。だから風土のはっきりした認識は、まず自然的風土の学的基礎に立たねばならない¹⁹⁾。最近における「地域主義」の主張もその学的基礎において自然的風土を的確にとりあげるべきことを強調している。筆者の発想「経営と風土の接点」も一度は問題を風土の根底にまで引きおろして経営を再考すべきことを要請している。

風土問題は、これを精神と風土にわけ——これは文化と風土、社会と風土でもよい、精神文化をひとつの上部構造、風土をその下部構造としてみることができる²⁰⁾。この関係を上手に表現したものが図2である。大変たくみな立体図解である。精神文化を精神(的)風土のうえに

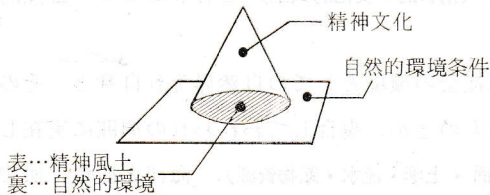


図2. 精神風土と自然的環境

※出所 宮川英二『風土と建築』39頁。

立てたところは出色の演出であろう。精神文化は自然的環境条件という基盤のうえに立って成立し、その基盤と文化との接点、すなわちその底辺の表面は精神(的)風土であり、裏面は自然的環境である²¹⁾。

人間存在に対する根元的契機として時間性〔歴史性〕を重くみたのが、従来のヨーロッパの思想的伝統であった。ハイデッガー、ヘーゲル、マルクス、みなそうである。それらは、文化の種々な異なった姿は進歩と後退のちがいであるとみる文化の歴史的発展段階説であった²²⁾。現今の日本が事実上、不名誉にも公害先進国になってしまったゆえんは、欧米の理論・技術を金科玉条にして近代化=資本主義化をおしすすめてきたところにある。これに対して人間存在構造における空間性〔風土の差異〕を重くみたのが和辻の「風土論」であった。和辻の風土論が静的な見方なのに対して、文明の生態をより動的にとらえたのが梅棹忠夫の『文明の生態史観』であろう²³⁾。これは主体と環境との相互作用の結果が、つもりつもって以前の生活様式では納まりきれなくなって、つぎの生活様式にうつる現象をとおして文明の変遷をみるのである²⁴⁾。

空間性と時間性、学問の態度としてはこの両者の合一が必要であろう。ひとつの文明はひとつの精神の産物である。あらゆる民族のこころや性格は風土とむすびつく。すなわち風土はひとつの国土に根ざした民族の風俗・生活様式・ものの感じ方など、すべてに現われてくる²⁵⁾。「地域主義」が主張するものは空間性(国土、風土→地域性)を十分尊重し、生かす産業化——こ

れずなわち資本主義化ではない——の必要である。もちろん時間性（歴史性→発展性）の問題も無視しえない要因である。自然・風土そのものもまた時間とともに発展し変化する。

それゆえ精神と風土は密接な関係にあるが、その自然は不変ではなくかわるものではないかという疑問が生じる。事実、自然はけっして永久不変なものではない。地球の表面はたえずかわっている。この意味からいうと人間精神もかわらざるをえない。このように自然はけっして不変ではなく、みずからもかわり、また人間もそれに改変をくわえてきた。しかし地球上の自然が今日の地理的景観を形成したのちの変化は、ときには局部的に大きくみえる変化があっても、グローバルにはほとんど目にみえないほどのものであるし、また人間による自然の改変もいままでのところ、精神と風土の関係を論ずるうえで問題にするほどのものではなかった。だが、この無限ともみえる自然の容量にもようやく底がみえてきている。人口の急激な増加はかつてみた地球と人間の相対的関係をいちじるしくかえ、近来の急激な人工の加圧は自然の平衡をやぶりがねないおそれを招いている²⁶⁾。

経営学の立場から考えてみよう。地球と産業発展の相対的關係における急速な変質は、自然・風土と産業活動の平衡関係を破綻寸前の状態にまで接近させている。地球の全生態系の保存とは別次元の価値観や行動準則にしたがって営為する企業経営は、自然・風土からの大反撥を招来するのに、もはや一歩手前という事態をもたらしている。「地域主義」が風土産業というものをごだいにせよといったり、地場産業の育成を叫ぶのはけっしてゆえなきことではない。風土性をないがしろにしてきた現代の資本主義的経営の企業性、営利主義性の発動は、いつしかきつと風土との決定的・宿命的な対決を余儀なくされるであろう。その結末は悲観的、破壊的様相を予想させる。

「地域主義」の提唱が《風土》＝自然・環境を、どうとらえているのか考えてみたい。図3（次頁）をみてほしい²⁷⁾。この図解は、先掲の図2の円錐部分に関するくわしい説明になっている。図2と図3は別々の文献から借用されたものであるが、円錐部分で密接な関係ができていゝる。参考のため図2をもう一度、図3の左上方に掲出しておいた。

既出の図1は経営を中心にみた「経営と風土」の関連図であり、図2はごく一般的にみた風土問題の図解である。これらに対して、図3は「地域主義」の視野からみた関連問題の包括的な図解説明である。いずれにおいても、共約する作図上の意図が読みとれる。なお図2に関して、図3との関係を配慮しながら、加筆（点線部分）をおこなったものが図4〔図2'〕（次々頁）である。矢印が変革の方途をしめす。

風土こそが民族固有の原体験の構造論的契機としての場なのである²⁸⁾。歴史性と論理的に並置されるべきものは、人間存在の人倫性である。歴史性と人倫性とは人間存在の社会性の縦軸（時間的）と横軸（空間的）をなす。その社会性〔＝歴史性と人倫性〕の根底において、それに論理的に先行する人間存在の基礎条件として風土性を見出しうる。

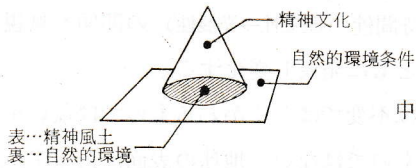


図 2. 精神風土と自然的环境

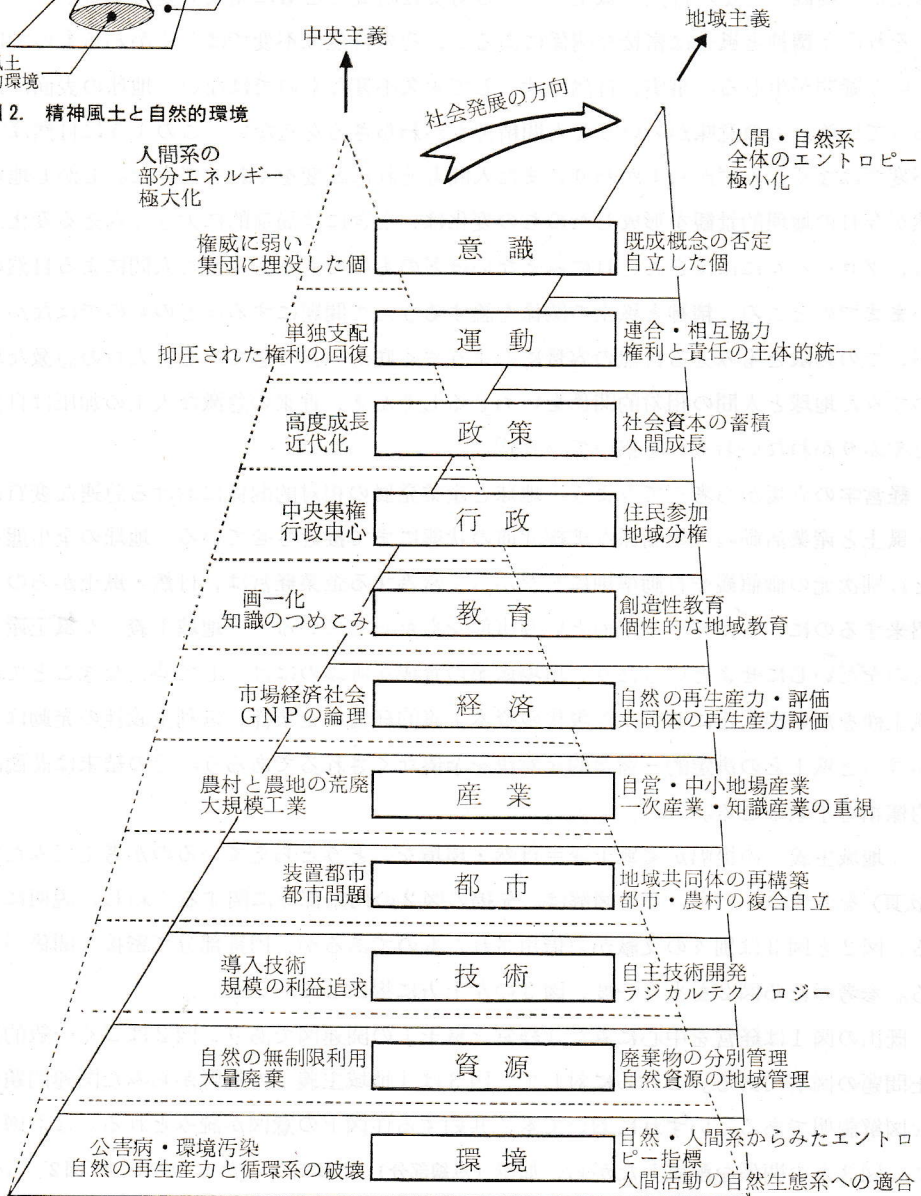


図 3. 地域主義の構造と目標

※ 出所 玉野井・他2名『地域主義』210頁。

こういうことでもある。思想あるいは哲学みずからの普遍妥当性を主張することにおいて自己絶対化の途をたどりながら、実はその主張がかえって自己相対化を結果する。この相対化の地平に思想史および比較思想、哲学史および比較哲学の視野がひらけてくるのである²⁹⁾。社会

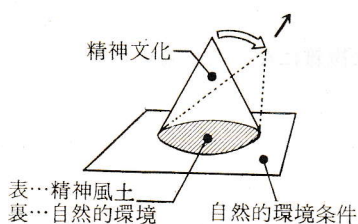


図4. [図2']

—図2への加筆—

性→風土性が思想や哲学に対してもつ含意は、ここにあることになる。

日本の経営学は自己の理論を自国の社会性〔歴史性と人倫性〕→風土性のなかにおいて吟味することをしなかった。風土性の洗礼をうけていない。これでは、日本の経営学がみずからの普遍妥当性を主張することにおいて自己の絶対化の途をはかりながら、なおかつそのうえで

自己相対化を結果させようとするには、まだまだ大きな無理があることになろう。日本の経営学においては自己相対化への学問的経路をしらないままに、自己の絶対化=絶対的普遍妥当性のみをただひたすら高唱する事例が多い。日本の経営学はみずからの立つ地盤→日本の風土問題をとおして、その理論性のあり方を根本的に再問する必要がある。この国の経営学のもつ国土性、風土性はなにか、どうも釈然としないのである。

風土はある土地に住み働く間柄の人間によって創出される。それと同時に風土はその形成主体である間柄の人間に対して一定の行動体系ないし活動傾向を刻印する³⁰⁾。文化・思想・哲学などは永遠、普遍の理想を追求する人間の営みの表現形態である。この営みの根底である原体験を介して風土の限定をうける。風土の限定をうけることによって、むしろ文化・思想・哲学などはそれらの生きいきした生命を吹きこまれる。だが風土の限定は直接無媒介的ではない。風土はその当初から間柄的存在たる人間の主体的原体験をくぐることによってその限定の機能を果たすのである。その意味で風土の限定は本来的に媒介的 (mediate) =間接的である³¹⁾。

日本の経営学はこうした問題要因をいかに認識しているのだろうか。企業経営も間柄的存在として自己の主体性発揮を、営利主義という行動基準にのっとりながらおこなっている。ここに<風土の限定>の問題性が出てくる。日本の経営学は自国の風土問題を理論的に包摂しえないでいる。風土問題は事実問題である。この国の経営学は経営と風土をとりむすぶ<媒介の論理>をもっていない。それはこれからの課題である。

しよせん、文化・思想・哲学などは具体的な間柄的存在たる民族の、原体験の構造論的場としての風土の刻印を最終的にまぬかれえない。人類は原理的に宇宙の風土によって拘束される。とはいえ、あくまで風土は人間存在が原体験をとおして自然的世界に切りこみ、その一部分のみずからの生存の場として主体的・合目的に組みかえ、創造してゆくものであるという<主体主義>の立場を貫徹する³²⁾。こうした風土に対する人間の主体主義という問題が、経営学の中核の問題である経営者の主体性というものと密着した結節点を有することは明白である。

企業経営は「風土の限定」をこうむると同時に、風土に対して主体性ある行動をおこなないながら働きかけている。とはいっても、つまるところ、風土の刻印をまったく無視しうるほどまでには人間の足は、この大地をはなれてしまっていないのである³³⁾。企業経営という存在も

その例外ではありえない。

今日のわれわれの人間生活、人間存在における風土問題は複雑になっている。

たとえばこうである³⁴⁾。

- (1) 農林鋳漁業に従事する者の減少。
- (2) 都市生産者の増大。
- (3) 工業製品産業の普及による生活形態の変化。
- (4) 中高層ビル生活者の増加。
- (5) 気候・土地すなわち風土にかかわらない職業、生活の増大。
- (6) 風土的な特異性がうすらいでいること。→生活の「倫理」に影響があること。
- (7) マス・ゴミの発達で地域の特有性が失われつつあること。
- (8) 世代間の倫理・価値観の断絶。
- (9) 新しい倫理・価値観(生きがい)の形成がまだみられないこと。
- (10) 資本主義体制発展のもとでの人間疎外の浸透, 資本主義理念・目標の動揺。
- (11) 学歴社会進行の激化。
- (12) 風土喪失の風潮。
- (13) 競争性の激化。

以上13項目のなかでめだつ傾向は、風土から人間生活・活動が背離していくようなようすがみられることである。このことは風土問題が放置されてよいということを意味しない。それどころか、だからというべきか、事態は、逆に風土問題に対するいっそうの深い関心が要請されているのである。すべての問題がとおのけばとおのくほど、なおさらそういわねばならない。そういう逆説的関連性が風土問題においては厳存する。まさに企業経営の問題がそのよい見本であった。

こういう点を考える必要がある。農業が土の支配から完全に解かれたとき、文明は生きながらえることができるか。この社会は「真の生産とはなにか」について考えることを忘れている。人間のおこなうことのできる真の生産とは、農林漁業においてほかになにがあるだろうか。工業、それは鋳業のうえに成立する貯金の下ろし食いにすぎない³⁵⁾。

経営学が研究の対象にする代表的・典型的な業種部門は工業経営にある。これが日本のばあい、国土(農林漁業・鋳業-自然・風土)を破壊するのにもっとも大きな役割をはたしてきたことはいうまでもない。この事実について経営学はいかにとりくむつもりなのか。

日本ほど自然を解体する方向が顕著で、またそれに痛痒を感じないですむ文化の土壌が培われた文明国家もない³⁶⁾。いわゆる先進国のなかで石炭資源依存からの脱却という愚行をなした国は、日本以外にない。鋳業についてすらそうであるから、他はおしてしるべしである。

こうした事態に経営学という学問が根底的な関与をなすべきことは無論であろう。いままでの日本の経営学は、そのかぎりではなかったのである。

注

- 1) 松井宗彦『情報科学入門』公論社, 昭和50年, 99-100頁。
- 2) 富山和子『水と緑と土』中央公論社, 昭和49年, 148頁。
- 3) 同書, 108頁。
- 4) 同書, 101頁。
- 5) 同書, 94頁。
- 6) 飯田賢一『近代日本の技術と思想』東洋経済新報社, 昭和49年, 104頁。
- 7) 斎藤正二『日本の自然観の研究 上巻』八坂書房, 昭和53年, 15-16頁, 著者緒言, 1頁。
- 8) 別技篤彦『モンスーンアジアの風土と人間』泰流社, 昭和52年, 72-73頁。
- 9) 現代日本思想史第1巻 宮川 透著『明治維新と日本の啓蒙主義』青木書店, 昭和46年, [あとがき] 198頁。「する」の個所傍点は筆者。
- 10) 岩波講座 哲学XVIII『日本の哲学』岩波書店, 昭和47年, [城塚 登稿「人間学の可能性—三木 清の「人間学」をめぐって—」] 186-187頁。
- 11) 飯沼二郎『歴史のなかの風土』日本評論社, 昭和54年, 200頁。
- 12) 13) 別技, 前掲書, まえがき。
- 14) 飯沼, 前掲書, 263頁。
- 15) 富山, 前掲書, 99頁。
- 16) 石毛直道編『環境と文化—人類学的考察—』日本放送出版協会, 昭和53年, [石毛稿, 序論「生活様式の歴史と環境」] 19-20頁。
- 17) 上原敬二『造園大系第7巻 風景・森林』加島書店, 昭和49年, 27頁。
- 18) 小田内通敏『風土日本の研究基準』叢文閣, 昭和13年, 109-112頁。
- 19) 同書, 116頁。
- 20) 21) 宮川英二『風土と建築』彰国社, 昭和54年, 38頁。傍点は筆者。
- 22) 同書, 39頁。
- 23) 梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社, 昭和42年。
- 24) 宮川, 前掲書, 39頁。
- 25) 同書, 40頁。
- 26) 同書, 42-44頁。
- 27) 玉野井芳郎・清成忠男・中村尚司共編『地域主義』学陽書房, 昭和53年, 210頁。
- 28) 小泉 仰・小山宙丸・峰島旭雄編『比較思想のすすめ』ミネルヴァ書房, 昭和54年, 315頁。
- 29) 同書, 313-314頁。
- 30) 同書, 319頁。
- 31) 同書, 321頁。
- 32) 同書, 321-322頁。
- 33) 同書, 322頁。
- 34) 岡崎公良『「ある」の研究—存在論の哲学—』新樹社, 昭和53年, 116頁以下。
- 35) 富山『水と緑と土』179頁。
- 36) 同書, 103-104頁。

(ii) 和辻『風土』の評価

まずこういう評価がある。和辻の著作『風土』は、彼の『倫理学』全3巻（現在は上下巻の2冊）とともに、日本人一般が抽象的思弁に拙劣で体系的構成的思索を好まないといわれているなかであって、まさに異例的な一大金字塔である。それは比較哲学的考察のためにも必ず通過すべき労作であり、比較哲学史の歴史的基盤の考察にとって貴重な指針を提供している¹⁾。

このような和辻への評価はかなり好意的なものである。が、見方によってはまったく別様の評価がなされていることを注意したい。

三木 清は1936年〔昭和11年〕に発表した論稿で「西田哲学」について、こういつていた。西田哲学は空間哲学的であるとすらいいうる特色を感じしめる、と²⁾。

ここで、和辻が話題なのに、なぜ西田哲学をもちだすのか。それは和辻風土論が空間性の視座から人倫性〔→社会性、風土性〕の問題をとりざたすることに関係している。

和辻の思想と論理の核心には西田哲学の系譜なしには考えられないものがある。和辻には西田のような形而上学が影をひそめて、倫理的なものが思索の主題として浮かびあがる。しかし彼の仏教の空観にささえられた人倫の弁証法的構造の把握には、西田哲学の「場所の論理」との深い契合がみられる³⁾。和辻にとって《間柄》の概念は西田における無と場所の概念に相似したものであった。一方においてはハイデッガーに依拠しながらも、倫理学の東洋的体系化にむかわんとする和辻の志向をみることができる⁴⁾。三木と和辻とは同じくハイデッガーの基礎的存在論から出発しながら、主体的自然を手がかりとしてハイデッガーの立場をのりこえようとした。そこには直接には西田幾多郎の哲学の影響があった⁵⁾。

さらにいえば、注意すべきは、本来合理的精神の結実であるべきカントやヘーゲルの哲学が井上哲次郎という指導者をつうじて深遠のベールをかぶり、あらゆる科学の基礎学としてよりも、むしろ宗教的心情のもとに、日本の思想的土壌に接種されていたことである⁶⁾。このことは、井上→西田→和辻の流れを念頭においていわれるべきものである。

風土論は決定論的な傾向をもって主張されるばあいが多く、それが可能論として展開されるばあいは少ない。和辻の『風土』はそのうちの前者にあたるが、人間中心の風土学を日本人の立場で展開したことは評価しうる⁷⁾。つまり『風土』は一種の解釈学的な東西文化比較論であり、その中心モチーフはあくまで日本とヨーロッパの文化諸相の相異を「人間存在の風土的規定」から解明することにあつた⁸⁾。

一方、和辻風土論に関しては、こういう展望がある。地表全体の新しい気候学的知識を頭にいたうえて、風土をなお直観的にとらえるのは、風土論のすすまねばならない方向のはずである。風土学の実体は豊かとはいえないにせよ、それは自然と人間関係を考察することとされている⁹⁾。

和辻「風土論」の現時点における理論的克服が意図されねばならない。彼の風土観は学問以

前であると評価されかねない「直観」的解釈学を、ただ決定論的に展開していたにとどまる。和辻の直観——「随所にイデエを見る眼」は、これが思いつきのな学問の方法のなかでとりあつかわれるかぎり、そうした理論上の壁をつきくずすことはできない。それは自然科学・人文科学・社会科学の徹底した再考をもって、はじめてその直観性が生かされることになる。

和辻倫理学の体系は、W. Windelband (1848—1915) の『哲学概論』(1914) の第2部第1章の構成をそのまま踏襲したものにほかならない。それは体系構成そのものに特色はなく、特色はやはりモダンなハイデッガー哲学その他のいかにも器用な活用にあった。そして彼の資質においても、体系家的な徹底的な思索力によりは、鋭敏な直観力と豊かな芸術家的センスにおいてすぐれたものをもっていった。それをもっともよくしめすのが『風土』なのである。和辻による「風土」の型に関する考察は、「特殊なる風土現象の直観から出発して人間存在の特殊性にはいりこもうとする」試みなのである。それはまた、マルクス主義的社会科学の普遍主義・科学主義の虚をつこうとする意図をもひめていた¹⁰⁾。

和辻風土論は直観性(直覚性・芸術性)において卓抜であったものの、社会科学に関する論究としてみたときは、結局、反面教師的な内実が多いのである。すなわちその風土論は問題提起として秀でた意識を含むが、問題の展開としては、あまり前むきのもがなかったというほかないのである。ともかく和辻風土論は日本哲学史の系譜上の特質——井上哲次郎→西田幾多郎→そして和辻——と不即不離の関係にある。

和辻の『風土』は彼の代表作である。その学問的性格は静止的、固定的であらざるをえず、観照的・審美的態度であることにおいて、まさしく彼の大正文化人的特色と貴族主義的反俗精神をよくしめしている¹¹⁾。和辻のいちばん問題なところは実践的気魄が教養派であるために元来欠けていたことである¹²⁾。

このことは、和辻風土論が当時の日本の社会科学のあり方に対する反撥であった点と関係して、検討を要する問題である。しかもそれが直観的な展開をもってなされるに終始していたことは、徹底的な批判の対象となろう。

高坂正顕は『西田幾多郎と和辻哲郎』(昭和39年)のなかで、こう述べている。和辻のすぐれた研究は文化類型の静的な研究であって、その動的な発展、展開の面はやや閑却されておりここに残された問題がある、と¹³⁾。京都学派の高坂ですらこういうのであるからには、和辻風土論の「静態論」的特性はよりいっそう明らかであろう。

和辻風土論の大きな欠陥は宿命論になってしまっていることである¹⁴⁾。人文地理学者の飯塚浩二が戦中から戦後にかけて和辻を批判してきたのは、その点である。飯塚はこの風土的宿命論を地理的決定論の日本的一変種とみて批判したのである¹⁵⁾。和辻の問題提起を今日の時点から再批判、再検討することは重要な仕事である¹⁶⁾。もちろん和辻を真に克服するためには、単にそれを無視し否定するのではなく、前進的に用いることによってはじめて可能になる¹⁷⁾。

和辻風土論の問題はまずつぎのようなところにある。『風土』は人類地理学的な著作であり、風土と人間の関係を哲学的に考えた思索の書である。だがそこでの問題のとりあげ方の欠点、弱点は、そこで生活している人間の生活様式——どういう生活をしているかということ——はぬぎになってしまい、いきなり人間のつくった文化のなかでもっとも高い宗教という問題にふれることに大きな飛躍があることである¹⁸⁾。

その原因は、和辻風土論の直観性が変じた観念性にある。人間の生活様式——物理的なものから価値的なものまでの生活範囲におよぶ人間の物質文化や宗教生活にあって、風土的要因がいかにかかわり、いかなる影響を与えているのか、これらを説明するための中間項となる《媒介の論理》が和辻の所論にはみられないのである。

それゆえ、和辻はこう批判されることになる。彼はあまりに直観的にすぎて客観的にはむちゃな立論が多すぎる。直観的に風土をとらえた結果、彼の立論では風土という観念だけは確立されたかもしれないが、風土区分法——モンスーン・沙漠・牧場は、その拡張はおろか部分的改造にもたえられないほどお粗末なものでしかなかった¹⁹⁾。これは大変きびしい批判である。和辻の風土論というもののもつ問題意識そのものはさておいて、甘受すべき批判となる。

こうした和辻への批判は、さらに以下のごとき批判につながる。彼の風土論は時間性に対して空間性を強調するあまり、その風土は「歴史的風土」になりきっていない。たとえ、自然環境そのものは一定不変であろうとも、歴史的風土は人間の主体的な働きかけによってつねに変化していくはずなのに、和辻が『風土』のなかで描いた風土は結局、一定不変な自然環境そのものにすぎなかった。ここに彼の風土論が風土決定論とよばれざるをえない理由がある。換言するなら、和辻は文化という人間の主体的な営みにかかわってくる範囲内においてのみ、風土の問題をとりあつかおうとする。しかし彼の『風土』は一定の自然環境において一定の文化が生れることは説明している。だが逆に同一の自然環境において内在的にも外発的にも、まったく異なった文化が生れることについては考察していない。ここに風土論が和辻の宿命論から脱却する途がある²⁰⁾。

和辻の『風土』を日本〔人〕論の関係で考えてみよう。和辻風土論は環境決定論にかたむき部族社会の論理で近代国家を説明しようとしたところに決定的な難点がある。しかし、それはまた、部族社会を原型とする基本的人間関係が、近代日本の基底に、なお存続することへのひとつの証言とみなすことができる²¹⁾。

このように、和辻「風土論」の長短は明らかとなっている。和辻の立場は、彼が生きてきた時代において流行した学問志向のもつ問題性に対してこれを反命題的に開削する視点をもって。と同時に、今日的な地平においては、その評価とはいちおう別に、哲学的、倫理的な問題意識としては勿論のこと、とくに社会科学的な問題分析の基盤のうえで究明されるべきものなのである。和辻の所論のうち、その短所は学問的な清算の対象であり、またその長所は現在

的な視座より徹底した批判再考を施されるべきものである。

ちなみにいえば、和辻評価が大きく左右にゆれるのは、その長短所のうちどちらを重くみて評価するかということによる。

和辻の倫理学、風土論については、これを和辻「史学」という点からみると、こう批判されている。

和辻史学にただよう甘さは、その偶然的な性格ではなくて、まさに本質的なものでありそうである。もしこの認識があやまりでなければ、和辻史学の克服の道は、いわば内在的にひらけてくるかもしれない²²⁾。また和辻倫理学の仏教哲学的基礎を分析するには、中国や日本における空観哲学の発展のしかたや西田哲学との関係をほりさげてゆく必要がある²³⁾。なぜならば今日、われわれが和辻の学問的遺産を継承しつつ克服していくためには、いわば文化以前、国家以前、ないしは倫理以前の次元にあるもの、すなわち日本の歴史と社会の底層をなすものをさぐりながら、それと表層の文化や倫理の関係を問うていくのが、ひとつの道であろうからである²⁴⁾。

和辻史学、彼の倫理学・風土論の根底にただよう学問的な甘さは、日本〔人、という国〕の甘さであるとともに、この国の学問・科学そのものの甘さでもある。和辻風土論の〈即自性〉的特質にその甘さが端的に出ている。

和辻倫理学の体系のなかで社会科学的問題、とくに経済問題に対する考察がひとつの弱体面をなしているという事実がある²⁵⁾。もっとも彼の思想の核心はおそらくもっと根深いところにある。その思想の根は、流動する政治状況の底にかくれた庶民性のいつもかわらぬ日常性と習俗の底辺にまで達している²⁶⁾。和辻のいわゆる「人間」の「間柄」における〈倫理〉は、そういう人間関係の力学を明確な認識にもたらしたものであった²⁷⁾。それゆえ和辻の思想について問うとき、われわれはいつのまにか、日本人とはいったい何者なのか、各人は日本人としていかにあるべきなのか、という問いのまえに立たされていることに気づくのである²⁸⁾。

だとしても、和辻倫理学は日本人の生活実感に根ざした倫理学であって、国家体制全体をおおうような倫理学たりえないにもかかわらず、あえて国家や政治、経済をもつむ倫理学たらしめようとするところに、その特徴があることになる²⁹⁾。端的にいうと和辻は、人間と人間との間柄的關係のなかであらわになっているところだけをみる。それだから、生産關係の面は出てきても、生産力の面は出てこない³⁰⁾。

和辻の倫理学は確かに〈生産關係〉の面をとりあつかっているが、それは間柄的關係：「人と人との間柄」という表象において解釈学的に現出されたものである。和辻の倫理学や風土論が社会科学的に觀察されたばあい、経済科学性の視野においては、それは批判の対象となるものばかりを提供することになってしまう。しかし、それでもなお、彼の所論が人間-自然の関

連性に関する分析視点として有用性を含むことも否定しえない。

和辻風土論を〈対自的〉な捕捉方法をもって、対決的な姿勢でとりあつかう必要があることは、それが風土の考え方の基本として、実質的には日本人の自然観と人間関係のとらえ方の伝統をふまえたものであることによる³¹⁾。いいかえると、それは日本人の伝統的な自然観ないし自然感情からきている³²⁾。倫理学者和辻哲郎は、自分の体内にしみこんでいる日本的自然観・自然感情を、少しも客体視できていない。彼がそのふんい気のなかにどっぷりつきこみながら、これがために風土の把握を客観的になしえなかったとすれば、和辻風土論のすきかえし作業は、今日のわれわれに課せられた学問上の肝要な仕事となる。

高島善哉が生産力理論の問題にひきつけて「風土論」を社会科学論の発展のための発条にしようとした意図は、高島が自己の方法のもつ普遍主義性を広角化させ、さらにそこで主体性ある学問の方途をひらこうとした点にある。こういうことになる。つまり、マルクス主義経済学のはあいには、現実の問題としてはソビエト・中国・東欧、その他に民族的特性とむすびついた社会主義的経済体制が根を下ろしつつあるけれども、理論のうえでは、マルクス主義の基本前提である階級の人類的普遍性の主張と民族的特殊性の関連が、まだ未解決の問題として残されている。というよりも、それがむしろ新しく解決すべき課題として現われてきている³³⁾。ここで風土の問題が高島によってもちだされたということなのである。

しかも和辻風土論におけるいちばんの弱味は経済科学性にあった。マル経はマル経で、風土問題——民族性・特殊性・個別性の側面の解明が弱体である。ここに風土論が経済学・経営学(もちろんマル経だけの問題ではないが)にむすびつくべき必然的経路が望見できる。和辻の哲学的主題の中心は「風土」によって包囲された人間存在の局地性もしくは空間性にあったということ³⁴⁾、そのような社会科学的意味あいでも再認識されねばならない。

和辻風土論の批判的再検討という課題がはたされたとき、はじめて彼の仕事のもつ「現代的価値」が十分明らかにされるというべきであろう³⁵⁾。和辻においては日本人の思考様式のなかに主体的自然を把握することを可能にし、容易にするような契機がひそんでおり、それがまた日本人の生活様式と密接にむすびついている³⁶⁾。以上の文中、生活様式とは生産様式というところまで含意をもたせてよいだろう。筆者の「経営と風土の接点」という問題構成にとっては、そのような解釈が要求されている。生産 ↔ 生活 ↔ 思考という様式の関係の思いうかべておこう。いうまでもなく、和辻の風土概念は学問以前の甘さがあるゆえ、社会科学的に精密な解明を必要とすることを前提にして、そういつている。

和辻倫理学における人倫観を考えてみよう。

和辻は未来よりも過去を重んじ、個人よりも全体に重きをおく。これが彼の倫理学の基本姿勢であるから、当然、歴史の見方としては伝統回顧的となり、倫理観としては現状肯定的になってくる。この点に戦後世代の思想史家から不満をもたれる理由がある³⁷⁾。しかし、このよう

な和辻の人倫観は日本の企業経営をかこむ「風土」問題そのものの分析にさいして、かなり有用な見方を提供してくれそうである。日本の生活様式と日本の生産様式における共通項になる風土問題の存在が、そうさせるのである。

和辻の「人と人との間柄」という人倫的把握概念が、二人結合から公共性・全体性の高まるのに応じて人倫組織を段階づけることは、明らかに全の個に対する優位を認めることになる。原理的には根源のもとにおける個と全との対等を認めておきながら、実際には全に優位を認めている³⁸⁾。こうした和辻の人倫観が「日本経営」論の分析において現実的な視点を与えることは当然である。その意味で和辻の倫理学的概念はきわめて有用性をもちうるのである。いうなれば大変な利用価値があることになる。だがまた和辻における問題性もみのがしえない。

つまり、ともかく和辻は人間存在の現実に徹しようとするリアリズムにおいて、実存主義とのつながりを保っているようでありながら、その世間的な考え方と全体性の偏重のために、実存の個別性が影をうすくし、たえず全体性が表面におしだされる³⁹⁾。和辻の国家観の問題は彼の思想形成史を理解するには、さけてとおれないはずである⁴⁰⁾。和辻風土論・倫理学が連係的に社会科学上の課題を投じているわけである。国家観の問題から企業経営観までその課題はひろがってゆく。

要するに、和辻『風土』の評価は、彼の倫理学体系との関係を十分保ちながら、過去の時間的な歴史的な分析視点をタテ糸、現在の空間的な理論的分析視点をヨコ糸にして、総合的に徹底した批判をくわえ検討すべきものなのである。

注

- 1) 中村 元『比較思想論』岩波書店、昭和35年、159頁。
- 2) 三木 清「西田哲学の性格について」『思想』第164号、昭和11年1月、68頁。
- 3) 信太正三『禅と実存哲学』以文社、昭和46年、221頁。
- 4) Gino K. Piovesana, 宮川 透・田崎哲郎訳『近代日本の哲学と思想』紀伊國屋書店、昭和40年、134頁。
- 5) 岩波講座 哲学XVIII『日本の哲学』岩波書店、昭和47年、〔城塚 登稿「人間学の可能性」〕185頁。
- 6) 飯田賢一『近代日本の技術と思想』東洋経済新報社、昭和49年、83頁。
- 7) 福井英一郎・吉野正敏編『気候環境学概論』東京大学出版会、昭和54年、25頁。
- 8) 生松敬三『思想史の道標』勁草書房、昭和40年、229頁。
- 9) 鈴木秀夫『風土の構造』大明堂、昭和50年、9頁、8頁。
- 10) 山崎正一『近代日本思想通史』青木書店、昭和32年、246-247頁。
- 11) 山崎、同書、248頁。生松、前掲書、215頁。
- 12) 鈴木 正『日本近代思想の人間類型』新泉社、昭和48年、206頁。
- 13) 高坂正顕『西田幾多郎と和辻哲郎』新潮社、昭和39年、53頁。
- 14) 伊東光晴・他『日本の経済風土』日本評論社、昭和53年、〔飯沼二郎・伊東光晴（対談）「風土と農業」〕196頁。
- 15) 生松、前掲書、232頁。
- 16) 同書、259頁。
- 17) 鈴木 亨『現代思想と文明のゆくえ』理想社、昭和47年、245頁。

- 18) 林 健太郎代表『アジアのなかの日本』東京大学出版会, 昭和50年, [小堀 巖稿 II 「アジアの風土と人間生活」] 40-41頁。
- 19) 中尾佐助「生態学における日本 照葉樹林文化の位相」『伝統と現代』第9号, 1971年8月号, 53頁。
- 20) 飯沼二郎『歴史のなかの風土』日本評論社, 昭和54年, 11-13頁。
- 21) 岡田宏明『文化と環境』北海道大学図書刊行会, 昭和54年, 232頁。
- 22) 湯浅泰雄編『人と思想 和辻哲郎』三一書房, 昭和48年, [井上光貞稿「和辻史学の課題」] 229頁。
- 23) 同書, [湯浅稿「解説 和辻哲郎研究の視角」] 371頁。
- 24) 同書, 383頁。
- 25) 同書, 338頁。
- 26) 同書, 342頁。
- 27) 同書, 352頁。
- 28) 同書, 311頁。
- 29) 同書, [「討論 和辻哲郎の学問と思想」] 22頁。
- 30) 同書, 44頁。
- 31) 湯浅泰雄『近代日本の哲学と実存思想』創文社, 昭和45年, 119頁。
- 32) 同書, 231頁。
- 33) 湯浅編『人と思想 和辻哲郎』[湯浅「解説」] 365頁。
- 34) *Piovesana*, 前掲書, 133頁。
- 35) 生松, 前掲書, 262頁。
- 36) 岩波講座『日本の哲学』[城塚, 前掲稿] 186頁。
- 37) 湯浅『近代日本の哲学と実存思想』132頁。
- 38) 湯浅編『人と思想 和辻哲郎』[金子武蔵稿「体系と方法」] 203頁。
- 39) 同書, [信太正三稿「和辻哲郎」] 67頁。
- 40) 同書, [湯浅「解説」] 344-345頁。

— つづく —

(べえ ぶぎる 経営学原理専攻)